

第3回ライブニッツ研究会発表要旨

ライブニッツの **res-ratio-signum**

酒井 潔 (学習院大学)

ライブニッツの「個体概念」説は、彼が「有るもの」ens を〈かならずかくかくのものとして有る〉、すなわち「もの」res と考えていたことを示している。また「理由律」principium rationis も、事物にはかならず本質つまり「理由」ratio が見出され、それが知性に「概念」conceptio rei として受け取られるという枠組を前提とする。ratio は、ライブニッツの形而上学で世界と事物に存在の理由を与え、論理学では「人間の思惟のアルファベット」と「普遍記号法」の中核である「概念」notio として機能するのである。また『人間知性新論』第三巻の言語哲学における、語の実在的意味を強調する議論は、名は概念を表示するという見方が定在することを意味している。この点でライブニッツはトマス・アクィナスの ens-ratio-nomen という教説に連続する面をもつ、とあってよい。

故山田晶教授の労大著『トマス・アクィナスの〈レス〉研究』（創文社 1986）によれば、中世哲学・神学において res をめぐる二つの伝統が存在した、一方はトマスの「もの—概念—名」の理論であり、他方にはアウグスティヌスに始まりボナヴェントゥラに完成される signum 論が対立するのだ、とされる。すなわち、すべての可感的な個物や出来事は、唯一の res である神を異なった仕方に表示する signum（記号）—図、像、文字、言葉—に他ならない。トマスが res と nomen の間に「概念」を認めるのに対し、アウグスティヌスは res と signum だけを認めたのだった。両者の立場の相違は、「存在するもの」、とくに可感的個物をまずは res と見るか、あるいは、唯一の res たる神を表示する signum と見るか、という相違に根ざしているのである。

以上のように中世の二つの伝統を概観したとき、われわれはライブニッツがこれへの注目すべき関り方をしていくことに気付く。ライブニッツはトマスの res-ratio-nomen をたしかに引き継ぎながら、同時にアウグスティヌス的な res significata(Deus)—signum をも展開しているのである。それは何よりも「表出」expressio、すなわち、すべての単純実体モナドは神を、そして世界を異なった仕方に表示するという議論に見出される。Quid sit idea(1678)やアルノー宛書簡(28.8.1687)では、表出するものと表出されるものとのあいだには類似は必要なく、一定の条件の対応、すなわちアナロギアが成立すれば十分だと示唆されている。可感的な個物はどれも何らかの仕方でも神そして世界の signum なのであり、その関係を理性は認識し得る。（但し、ライブニッツは人間の理性を自立したものと見る点で、アウグスティヌスが神による照明（恩寵）が要るとしたのとは異なっている）。ライブニッツの世界モデルは、もし「モナド」の自発性が看過されれば、絶対存在（神）に対する個物の無力を強調するスピノザ主義に陥りかねないとも言えるが、そのような性格はアウグスティヌス的な signum 論の継承でもあるその「表出」理論そのものに起因している。

ライプニッツは個物の存在をめぐり、トマスの **res** 論と、アウグスティヌスの **signum** 論を共に肯定し、自らの論理学や存在論の中心に受容している。こうした総合的な思惟は、哲学の進歩を折衷や調和に求めようとしたライプニッツ自身の哲学史観にも基づいている。